

私たちは別の五億円世界

2017/10/30 山本健介  
誤字脱字改稿版「」稿

## 登場人物

- まひる (子供を亡くした女)  
小池 (まひるの恋人)  
ツルハシ (まひるの旦那)  
ニホエヨ (小池の新しい恋人になる予定の人)  
ロン毛にしようとした人 (ツルハシの幼馴染)  
モグラ (まひるたちがいる地面あたりにいる動物のモグラ)  
外部人 (「誰でも、彼でも、そこに居ていい人の家」の外部の人)

## 場所と時間

まだ人々が生きていたころの社会。

私たちが生活している世界とは異なり、まだ人々は死んでいない。だが、この世界の人々は、死んだあとしゃべったりすることができないため、死後自分の感覚や思考を生きている人に伝えることができない点が私たちの世界と異なっている。

おそらくは二〇一一年からやや少しあと。Twitterはあるが、ラインはまだない。

海辺にみえるが、川が巨大すぎるため海に見える。

舞台奥、向こう側に蜃気楼のように別の大陸が見え、それはもしかすると私たちの今住んでいる世界のようにも見える(映像のようにそこは絶えず見え方が変化している)。

観客が観客席(それがあるかどうかは分からないが)に入る遙か前から、まひるは舞台上に居て、川の方を見ながら、読書している。

木の椅子が一脚、上手に。簡易的な机もあり、そこには筆記具とノートがある。

上手には通路があり、それは劇場(かどうかは分からないが、ある空間)から外までその通路は伸びていて、いなくなることができる。

下手には下手に伸びる螺旋階段があり、天に伸びている。

天のある一点から上は誰からも見えなくなっているが、段階的に見えなくなる仕掛けがしており(スモーク?)、「体半分だけ見えない」という事が物理的にできない様になっている(「ぼんやり見えるが、消えていない」という状態から「ぼんやりしていて輪郭すらうかがえない」という状態に変化できる)

川のように見えている部分は渡ることができる。そのまま奥に行くことができるが、奥の別大陸の部分にはたどり着くことはできない様になっていて、途中でハケられる仕組み(奈落?)になっている。

また床のあちこちにはモグラのための穴が用意されている。モグラは何力所からか顔を出せる。川の中にも穴がある。

以下、これから書くのはあらすじなのだが、これは戯曲である。

◆ 明日、全世界の人々全員が五億円もらえることになった。

正確に言えば日本円ではないのだが、ほぼ五億円の価値の金額が、各個人の口座に振り込まれることとなっている。

それで、今はまだ昨日のだけれど、その振り込まれる明日にむけて皆は準備をしていた。準備といっても、預金口座を新たに作り（受け取り専用の）、その口座を何らかの手段で神に伝える。すると、神はこの世界に、明日、一人一人五億円を振り込むこととなる。

それで、その「明日」というのも、ちよつと時間間隔が私にはよくわかってないのであれだが、正確に言えばもうあと数時間後みたいなところがあり、それが振り込まれる時がきたら、私たちはいったいどうなるのか結構見当もつかない。

◆ 例えば心配しているのは、誰も働かなくなるんじゃないかとか。

たしかに昨日までは、まだ「実際にはお金は振り込まれるかわからないから働いておこう」という人達がいるせいも、目立った混乱は起きていなかった気がする。とはいえ細部では本当はいろいろともう、起きていたのだが――具体的には、たとえばガソリンスタンドの多くが稼働していなかった。ガソリンを買い占める者が出てきたからだ。あるいは、それを見越してガソリンの販売を停止して貯蔵しようとする者がいた。それに伴い、車を運転する人がガソリンをセーブするために極端に減った……など、いろいろある。

◆ まひるはそれらを、見て見ぬふりをしていた。まひるは、このまま何も起きず、神のお騒がせで終わる、と思おうとしていた。それでもしつかりと預金口座を作り、神に口座を伝えてその日を待っていた。

◆ 川のほとりの、自作のテラス席だ。ただ川のほとりに椅子を置いておくだけに過ぎないが。川と言ってもそれは尋常でないほど広く、海のようにも見える。まひるは土手の、広くなった場所の、そこにいる。かつてそこは自分の家だったが、いまはもうない。まひるは自分の椅子を仮住まいの場所から持ち出して、そこに座って本を読んでいる。まひるの個人資産で具体的な物といったらこの椅子とテーブルとペンとノートくらいだ。

◆ 『不破哲三・著』と書かれた、七巻組の本のうちの二巻目だ。まひるはひさびさに本を読んでいる。大学にいたころはたくさん読んでいたが、子供を産み子育てをするようになり、また子供が死んで葬式をしたり、旦那と離婚協議の話し合いをしているうちに本を読まなくなつた。『不破哲三』という著者は政治に疎いまひるでも何となく名前を知っていた。た

だ、この名前がペンネームなのは奥付のプロフィールを読むまで知らなかった。思ったよりも語り口はライトで（というのもこの本は講義録をまとめた本だった）それでも内容は難解であり、ノートを取りながらゆっくりと本を読んでいる。

夜になると、停電するようになったので、最近は何で、夜は思っているより暗い。まひるは日があるうちに本は読み切ろうと思っていた。なぜ停電するようになったのかというと、たぶんだが、いよいよ五億円を振り込まれるのは確実だと思った人々が、電力会社に出なくなったからではないか。労働力が担保できず、停電するようになったのではないか。ということは、お金が振り込まれたら、五億円が、そしたら、誰も働かなくなるのではないか。

いくつかの行政サービスが停止しかけている地域もあると聞いた。全国の動静を知る手段は、私たちには少ない。インターネットは政府によって通信制限が掛かってしまったため（私たちが選挙に行かないからこうなったのだが）、五年前のように簡単に世の中の事は知ることができないが、ネット回線を利用したラジオ放送が有志で行われており、それによると北関東から北、金沢、甲府、あと京都府の北といった場所では、ゴミ処理回収や下水道が止まっているという噂があった。

呼びあげられる地名を聞いていて、まひるは「お蕎麦の美味しい地域ばかりだ」と思った。



旦那と同時並行で付き合っていた恋人は車を持っており、旦那が仕事へ行っている最中、恋人に誘われ車に揺られてわざわざ遠い場所まで蕎麦を食べに行った思い出がある。「袋田の滝」という所に行ったとき、そのそのもの滝もよかったけど、近くに会った蕎麦屋がすごくおいしかった。ソバガキもおいしかった。値段も安く、お通し？で出されたさしみこんにやくも大変美味である。「こんにやくおいしいなあ」と恋人は笑っていた。恋人は箸の持ち方が変だった。こんにやくをつるんつるん落とし、蕎麦をびしゃびしゃとたくさん溢す。

「俺が年収一千万円あったら、今からでもまひるに結婚を申し込むんだけどな」

と恋人は言った。

私は、

「箸をそういう風な持ち方をするような人とは結婚できないし、子供は死んじゃったけど旦那の事は心から愛していると思うから、一千万円あったらダメだと思っ」

とその時言った。

「じゃあ二千万円じゃダメか？」

恋人は言う。私は笑った。

「まずお箸の持ち方からはじめてみようよ。そうしたら旦那より好きになるかもしれない」

「箸の持ち方はなあー。年収三千万円はどう？」

「お箸の持ち方直したくないの？」

「うん」

「どうして？」

「いままでずっとこれで来たから、結婚ごときで箸の持ち方直してようじゃ、俺絶対就職できない気がするし、覚悟がぶれないために俺は箸の持ち方直さない。こんな俺でよければ結婚してほしい」

と言われた。蕎麦は美味しかった。

それで、その恋人が今、私のテラス席の近くにちよつと前からいて、ぼんやりしている。川を見ている。海みたいな川だ。波が寄せては返していて、低い堤防にしづきが上がっている。曇りだ。風も少しある。動物の匂いがちよつとする。そんなにきれいな川ではない。

「本は読み終わった？」

と恋人が聞いてくるが、曖昧な返事をした。この人の前では曖昧な私になろうとしている。ぐにやぐにやとし、つかみどころがなく、それほど美しいとは思えない自分の外見を、心のレベルで崩して、よくわからなくなってやろう。そうすれば、なにもしないよりはモテるかもしれない。私に形がはつきりとあるから美醜を問われるのだ。ぐにやぐにやになりたい。なので私はいま、ぐにやぐにやになっている。ふかした芋をよく、裏ごしするじゃないですか。あれである。

「なんかね、電車が、止まってるみたい。電車を運転する人がいないみたいで。今、給料とかそういうんじゃないく働いている善意ある人があつまって、どうやって鉄道を動かそうか会議してるみたいよ。」



都心部からこの街にくるには、鉄道が一番よかった。

国道も整備されているが、この街の中心部にはロビンソンという百貨店があり、その百貨店目当てで渋滞が多く——この渋滞を地域の人々は『ロビンソン停滞』と呼ぶ。水曜日には解消される。なぜなら、ロビンソンは水曜日は定休日だからだ——都心まで出るのはスケジュール通りいかない。時に道が完全封鎖され身動きが取れなくなることもある。

「電車、動かなくなったら、もうボードゲームショップに行けないね」

この街には小学生向けのカードゲームショップはあっても、ボードゲームを専門に商うお店はない。

「いや、でも頑張ってるみたい電車の人。どうすれば、給料目的じゃない人たちであつまって、本当にただ電車を動かしたい人が、いかにお客さんを巻き込んで電車を動かせるかみたいな。そんな話をなんか。」

そういえば旦那も今職場でそういう話をしているらしい。

旦那の職場でも明日になれば五億円がもらえるので、退職する人が出始めたという。その

穴埋めをするため、旦那はここ数か月間、休みなく職場に行き、人員の手配で苦心している。ずっと働いている。ずっと寝ていない。

旦那は過労死すると思った。

なので、旦那に「わざわざ埼玉の家に寝に戻ってこなくても、夜遅くなって疲れたんなら職場の近くのビジネスホテルやネットカフェで寝れば、少しは睡眠時間がとれるんじゃないか」と提案した事がある。旦那はびっくりしたような顔をしていた。

「家、戻らなくていいのか」

「ええ。ご飯作ったときは帰ってきてほしいけど」

「でもそしたらそれは、悪い気がする」

「なんで」

「家族だろ、俺ら」

「でも家族を維持するために睡眠時間削って体調悪くなったら本末転倒じゃない。職場に泊まったり、ビジネスホテルとかそういうの利用したらだめなの？」

「お金がない」

「え、もうすぐ五億円振り込まれるじゃん。二人合わせて十億円だよ」

「本当にもらえるかどうかわからないじゃない、それは」

「でもお金はあるでしょ。使わなかった奴」

「学資保険とか、教育費か」

「死んじやったし、いいじゃん」

「……ごめん」

「あれ、なんでこんな話になっちゃったんだっけ。……あれなんだろう、なんであなた謝ってるんだろう」

「俺のこういう態度がよくないんだよ……俺の……こういう、人の気持ちがよくわからない態度だよな」

「え、なんでだろう」

「すまん。俺はお前の気持ちをよくわからないままで。わかるうともしていない」

「違う違う。なんでそんなにショック受けてる顔するの？」

「いや、してない」

「してるじゃん」

「いや俺は今、なんの感情も出していない。平然としているこういう態度だよな。まひるを傷つけるのは」

「ちがうよ？ ちがくない？ あれ私今、責めてる？ え？」

「いや責めてないよ、責めてない。俺が悪い。もうしわけない」

「だからなんで謝ってるの？ それ今何に対しての謝りだからわからないから、私今不安になってるのね」

「不安にさせて申し訳ない」

「え？ え？ なにー？ なんなのー？ 私に今全然伝わってないよーその謝り。突然なんか謝られてるかんじがするよ今それ、そういうのこそやめようって話して、話したんじゃないかったっけ。あれ？ あれ？ え？」

「うん。した。ただ俺は馬鹿だから何度でも同じ過ちを繰り返してしまう」

「違う違うそういう事言いたいんじゃないよそういう事言いたいんじゃないよなくてね、そういうんじゃないよなくてね、なんだろうね、あれ？」

変な間。

「今ね、なんでかわからないけど私あんたにぶたれたこと思い出しちゃったのね」

「……それはもう謝っただろ。結婚する前の話じゃんか」

「でもぶつたの事実でしょ？ その時にね、あんたと暮らしたらずつとこの先ぶたれ続けんなのかなーって。それってさあ、それってさあ、中学時代にさあ中学一年だった頃わたしがその時一つ上の頭の悪い先輩、中2の先輩が中学生のくせに大学生と付き合ってた、それでぶたれて、顔腫らして、腫らした顔ながら私にのろけて、バドミントン、バド部の、バド部の部室で、わたしがバドミントン部だった頃ころ、バドミントン私バドミントン私だったのね私バドミントン。バド部の部室、先輩と私とバド部二人しかいない部だったから、部室で先輩と二人なのねバド、試合つうか練習ずつとその先輩と二人だけでしてバドミントン、でもバドミントン、先輩彼氏作って、彼氏の家にそうめん食べに行ったりして大学生の一人暮らしの家に、そしたらぶたれて、彼氏の家に行ってはぶたれて、それで先輩は部活で放課後私とずつとバドミントンするのね二人で、バドミントン。バド。先輩、顔痛い痛いって言いながらシャトルシュツ、シュツ、シュツって、シュツシュツシュツするたび、先輩彼氏とか作らなかつたら絶対県大とか出てたのにそいつの、麺茹でるそうめん茹でる大学生の彼氏のせいで中学生のバドミントンの県大会人生を奪ったのね。それがね、今でもずつと許せないの。顔殴る彼氏。先輩のバドミントンの夢ぶち壊して、でも恋愛だから仕方ないけど好きになるのは、でも殴るのは絶対だめじゃんか」

「それは、それは、それは、それは（話の区切りで何度も「それは」と言っている）、……もう謝ったはずだろ。謝ってお前が許したから、俺たちは結婚したんだろ。そうだろ？」

「謝ってない、たとえ謝ったとしてもそれはその時一瞬だけの事で殴った事実は絶対に残るし、私シヨックで、本当にシヨックで、わたし殴るような男と付き合ったんだよ？ おかしくない？ わたしおかしいよね？ バド部の先輩をずつと見てて、ずつとこうはなりたくないって固く誓って、絶対に絶対に絶対について誓って、誓ったのに、あんたは殴った。」

「それはもう謝っただろう。え？ じゃあ俺はどうすればいいんだ。死ねばいいのか？」

「そういわれると私はフリーズしてしまい何も考えられなくなった。皆さんや神には信じてもらえないかもしれないのだが、この世界に住んでいる人間はほぼ全員、死者の声を聴くことができない。」

死者をよみがえらすこともできなければ、死者とコミュニケーションもとることも困難

だ。

なので、家族や親族に死者が出ると、大変傷つく。

「そんな事言っても、生きている者には、ロボットやAIにすら寿命があるんだから、死は不可避じゃないか。それを傷つくのを知っていて、いったいどう毎日をすごしているんだ？」と疑問に思うかもしれないが、事実私の足元でモグラが顔を出し、疑問に思っ先のセリフを言っているのだが、私たちは死を恐れている。ただ、恐れるのに慣れ過ぎて、忘れていく。

この感覚は、神様や皆さんにはわからないかもしれないが。それでも私たちは一生懸命毎日を生きているのである。



テラス席に、旦那のツルハシも姿を見せた。ツルハシはぼろぼろの服を着たまま、しばらくまひると、その恋人の小池が二人で話していたのをずっと見ていた。小池はツルハシさんに「どうもつす」と手を振り、紙袋にあったお芋を渡す

「ツルハシさん、お芋ですよ」

「お芋……生だな」

「サツマイモなんすよー。ベニアズマ言うらしいです」

「……これを、くれるの?」

「え、そうですけど? え?」

「あ、うん。……まひる、生の芋、もらっちゃったぞ」

「芋? ……どうして?」

「うんなんか車、ここにくるまでに、もう車動かさなくて、みんななんか明日五億円もらえるからって、どう関係しているのかよくわかんないですけどガソリンスタンド、人いなくてもう全部やってなくて、じゃ歩こうかなって思っ」

「ん? 芋の話?」

「え、ここまで歩いてきたんだ」

まひるはけっこう驚く。小池は都心に住んでいるが、ここは都心からそう離れていないとはいえ、徒歩だと半日以上かかる。

「結構今、歩いてる人多いよ。震災の時の帰宅困難者を思い出すね。あの時俺は甲州街道沿いのコンビニでバイトしてたんだけど、コンビニで。ずっとみんな、暗い道を列になって歩いてたんだよな。で、俺の店にトイレ借りに来たりして。コンビニの中の商品、特に「電池とかないんですか?」「あーは、ないですよー」「あーそうですか」みたいな話何回もして、だんだんこのコンビニの存在意義トイレしかないんじゃない感じがなって、まさに俺が働くのにふさわしい、びったりだなーここって思ったりして、でも店長責任感とかすごいから震災のショックで動けなくて泣いてたから俺コンビニの外出て、甲州街道歩く人



達に向かって呼びかけたもん。『トイレありまーす、甲州街道、柘植花二丁目店にはトイレありまーす』って呼びかけて、そしたら店長、お前普段やる気ないのにこういう時だけやる気あるなって笑われて。店長その時精神が崩壊しているのに笑ってくれて、精神崩壊している人を笑わせる俺のお調子者っふりってすごいんだなって急に客観的になっちゃって、それで、何でこんな話をしたのかというと、きょうはその逆の立場で、俺が外歩く人の役で、誰かがコンビニでトイレ貸す役になってるんだろうなって思いながらここまで歩いてきたんだよって話をしたくて、今してるんだけど。……そういうお話ね。」

「それで、生の芋はどうしたの？」

「あ、生の芋、なんか『苦しいときはお互い様だから』って言ってこの辺の農家の人に貰ったの」

「ああ、そういう芋なのか？」

ツルハシはようやく納得して生の芋を安心して触る。

「今、苦しいときなのかね？」

ふと小池は真顔になってまひるに尋ねる。

「苦しいよ」

「そう」

「明日五億円もらえるけど、電車とか止まるし、電気だつて……埼玉だとなんかの、こっちは。電気通つてる？」

「使える電源と使えない電源があるみたい。なんか野外にもいろいろコンセントあるじゃない。だから、さつき小学生が電動式のベイブレードの充電器？ みたいなやつをあっちこっちに差してて、ベイブレードが回ったらコンセント生きてる、みたいな、冒険？ 遊びみたいなのやってたよ」

「ベイブレードってコマみたいな奴？」

「そう、最近、電動式なんだよね」

「コマくらいさあ、手で回せばいいんだよね」

「小学生にも五億円もらえるんだっけ？」

「口座を作れば誰でも。」

「え、それはいくら何でも……そうだっけか？」

「ナンカスゴイネ」

「小池さん、口座作れた？」

「うん人に作ってもらったーけどなんか本人がやらなきゃいけない事が多かったから実質俺が作ったようなもんだったよ」

「作ってもらったのは小池さんの次の彼女？」

「そうだよ。あ、まひる前言ったっけ、俺の次の彼女」

「あれでしょ？ すぐ悲しくなっちゃう人でしょ」

「悲シミガスゴイネ」

「そうなんだよ。悲しくなっちゃうらしいんだよ……なんでも」

「あーでもわかるよ、悲しくなる気持ち。私もよくそうなるもん」

「まひるも確かによくそうなるんですけど、小池さんはどうやってパートナーの悲しくなる気持ちを、あれしてますか？」

「フワー、パートナー悲シイ、フワー」

「あ、えっとね、俺はなんか……なんか……あれなんか俺いろいろしてた気がするな」

「小池君、基本的に馬鹿だからいてくれるだけで心が安らぐよ」

「いや小池さん馬鹿じゃないでしょ」

「いや俺馬鹿なんですよー」

「小池君、クレヨン食べちゃうだもん」

「クレヨン？」

「違うあれ食べられるクレヨンだったの」

「小池さん……クレヨンはダメだよ」

「違うんだって試してみただけなんですから。俺だってクレヨン食べたら駄目なことくらいわかりますよ」

「クレヨン食ベト栄養ニナルノ？」

「でも食べたんだろ？」

「はい」

「なんで食べた？」

「なんか、子供の頃、クレヨンって、全色そろってるだけでテンション上がったのに、今の俺は簡単にテンション下がったりして、情けないなっておもったんですよー」

「ああ……」



遠くの川の対岸の方で、うごめいている何かがある。三人はそれに気が付くと、そっちの方に目をやる。しばらく三人はそのうごめきに見入っている。

「生の芋どうしよう」

「生の芋、あー、たしかに。ここなんか蒸し器とかないですよね」

「たき火する？」

「ああ……」

男二人は面倒くさそうだ。

「アルミホイルなんて当然ないだろ」

「ないですね」

「よくね。……漫画の中で、芋とか出くるじゃないか……よく出てるはこないか。全然よくはでてこないな。でもまあ、芋が出てきたりするだろ。そうすると、その次のシーンとかで、

たき火とかしてて、そして主人公たち、焼き芋食べたりしてるだろ……俺はあれ、本当にリアリティないんだなって思ってるんだよ」

「え、なにどういう」

「俺、仕事してるじゃない……今も仕事なんだけどね本当は。焼き芋というゴールに至るためには、さまざまなプロセスが必要でさ。例えば、芋を焼くための……たき火とか、相当大変だぞ。準備や……やる場所の確保とか。そりゃ埼玉ならいいけど職場とかだと本当にたき火にはさまざまな許可がいるんだから。書類かいたりして、申請してさ。で、じゃあいざ、たき火が許可が下りたとして、まあ、部下に枯れ木とかを集めさせるよな。俺の部下、部下と言うか同志だけど、同志に伝える時に『今からたき火するから』だけじゃ、これは仕事として駄目なんだよ。目的を共有しなきゃいけないし、同志たちのメリットも俺は示さないとイケないんだよ。『これより芋を焼くが、芋を焼くことでお互いの連帯感を強めて、また秋の味覚を共有するのが目的である』みたいなことをちゃんと提示してさ、コミュニケーション取って共有して……このゴールはちよつと甘いな。他の奴がこんな提案して来たら俺はきつと再考してこいって言うてしまうな……だめだなこれは。だって「連帯感を強める」って、それは焼き芋でないとできない事？　って思っちゃうんだよ……長縄跳びとかでいいじゃないかそんなもの。……でも縄跳びもだめか、障害持つてる人とかと一緒にできないもんな。障害持つてる人と、縄跳び飛ぶことで連帯を高めるのを強要するとかそれは……差別だよな。俺らが差別じゃないって思っても会社としてそれをやるときはやっぱり考えなきゃなんだから……だからそうか、だからか。だから、ビール飲むとかかが普通になっていくのか。やつば。縄跳びじゃだめか。飲み会か。俺、お酒が言って気も飲めないから気持ちわかんないけど、連帯感を強めるなんて理由でたき火して焼き芋とか、なんかおかしいと思うんだよ……明確な、焼き芋でないとイケない理由とかをちゃんと考えてから会社でプロジェクトチーム作って同志たちを誘うべきで、それができない以上、普通は漫画みたいに突然芋が出てきたら、たき火して、次のシーン焼き芋になつてるとか不可能な気がするんだよ。あとね、普通に焼き芋って、アルミホイルとか……専用のなにか包むものがないとね、黒焦げになるから。俺は黒のスーツ着てる人間って、地獄の業火に焼かれて真っ黒になった亡者たちに見えて仕方ないから、だからちよつとでも青いスーツを着ようと毎日頑張ってるんだ。まあだから、焼き芋なんかできるわけないんだよ。だめなんだよ。社会だと。本当何をやろうとしてもダメなんだよ」

ツルハシは話をしている間に、だんだん髪の毛をむしり始めた。ツルハシの癖なのだが、会話の最中自分が辛くなると、自分の体毛を引きちぎるクセがある。体毛を引きちぎっている最中はつらい事を少しだけ忘れられる。まひるは、それが嫌だった。引きちぎった体毛を私が掃除する、というところまでこの人は神経回らないんだろうなと思うと、自分が無視されている気がして本当につらいのだ。

「そうか。大卒の人って焼き芋ってだけでそんなに考えなきゃいけないのか」

「いや俺の場合はだよ。部下っていうか同志を使う時は、プロジェクトするにあたって同志

「たちと俺と会社が全部ウインウインにならないとあれだから」

「同志ってなに？」

ツルハシは別に前から『同志』という言葉を使っていたわけではないので、まひるは先のセリフのさなかずごくいぶかしがっていた。

「あ、ここ最近で会社の人の事を『同志』って呼ぼうと思ったんだよ。ほら、五億円振り込まれるじゃない。……だからさ、もう給料を中心とした関係性じゃないんだよなって思ってた社長にね、『俺たちは同志ですよ』って言う事にしたの。会社ってそりゃあ給料目的だけだ、給料だけが目的じゃなかったから。だから頑張れたところもあるし、それだよ」

「あ、わたしも美大だったんだけど、サークルでね。犬サークルに私入ってたんだけど、犬サーの人が集会で突然『みんなの事を同志って言おうと思う』って宣言してたの。そしたらその翌日くらいからサークルの犬、次から次へとみんな死んで。……犬って幼少のころから飼うじゃん。だから、大学時代位にちょうど寿命で死ぬじゃん。そのタイミングだったんだよ。同志って言いだしたらみんな死んじゃった」

「同志ってなに？」

「志が同じ人だよ」

「ああ」

そういうとまひるは突然話す気が無くなって川を見ていた。

川の向こうでは相変わらず何かがうごめいていている。まひるが話さなくなると、小池もツルハシも話さなくなつた。太陽が落ちていく。ゆっくりと落ちていく。暗くなっていく。

小池は、「暗くなっている、どうする？ いつもどうしてるの？ まひるは暗くなると。」

というような念を發する。あまりしゃべる空気じゃないからだ。いつも小池は、まひるとは日中の明るいうちにしか会って話さない。暗くなるまでそばにいるなんて珍しい。初めてだ。小池は今、初めての事をしていいるなと思った。

「暗くて本も読めなくなるね……家に帰らないの？」

念じてもやはりだめだったので、口にした。この世界の人々はテレパシーが使えないので、思っている事があつたら口にして言葉にでもしないと伝えることができない。

「ああもう家とか今私たちがもう今もう家がないんだよ」

「え、どうしたの」

するとツルハシが「俺のせいですまん」と言い出しまひるは「別にあなたのせいじゃないし」と言い、また会話が止まる。小池は、全く分からないが、とりあえず察したことにしようとし、実際に「まあ、何かあるんだろうなあ」と口にする。



小池は、まひるの恋人なので、まひるの美しい部分や、安全な部分しか目にしていない。まひるが細部ではかなり破たんしている人間だというのは薄々把握しているが、あんまり

理解していないし、理解していないからまひるは楽に俺といられるんだろうなと思ってる。

その時小池のいる地面からモグラが顔を出し、「どうしたんだ。この二人は。家がないのか？」と尋ねてきた。

まひるもツルハシもしゃべる気配がないので、小池はしかたなくモグラに向き合う。

「おい、モグラ」

「そうさ、おいらモグラ」

「モグラも振り込み口座作ったの？」

「いんや。おいらモグラだからさ。モグラが、口座作りに銀行行ったらさすがに……」

「まあな」

「口座作る以前にいろいろやる事あるだろっていわれそうだよな、人間どもに」

「まあ確かにな。」

「人間には五億円振り込まれるけど、モグラには五億円振り込まれないんだよな」

いつの間にか、小池とモグラが話しているところを、まひるとツルハシが眺めている。

「小池くんどうしたの」

「ん、いや今、モグラと話してた」

「ああ……。いんの？ モグラ、そこに」

「え、いやわかんないけど」

「え？ は？」

「あー、そうか」

そういうとまた間ができる。何をしたらいいかわからない間だ。

「……モグラには五億円振り込まれないらしくてさ」

「モグラの話はいいよ。」

そういうと、小池も黙るしかない。

そして黙っている間、小池は、ツルハシとまひるは本当に夫婦だったんだなあと思った。



今日まひるに、五億円振り込まれたら二億円くれないかと相談しに来たのだった。

小池の新しい恋人から「昔の恋人がもらう五億円の中から二億円もらうようお願いしにいった」と強く言われていたからだ。

今の恋人が、なぜ昔の恋人から二億円（五億円全部ではなく）もらってくるように言い出したのか。新しい恋人になる予定の者が言うには、「小池君と付き合ってた時代は二人一組みたいだったんだし、今でも名目上はあなたが恋人なんだから、半分くらいはもらう権利があるはずなんだよ？」という。

「いやでも、まひるは俺と付き合う前からちゃんと結婚してる人がいて、一時期は子供もい

「ただよ」

と説明した。だが、小池の恋人になる予定であるニホエヨは納得しない。

体を隙間の中に入れて、みっちりした場所にニホエヨはいる。

そういう場所にいると安心できるらしい。今、小池は自分が思い出した、思い出の中のニホエヨに話しかけているが、具体的にこの世にいない時ですら、ニホエヨはみっちりとした隙間を欲しがった。

やがてニホエヨは舞台上の、螺旋階段の手すりの隙間飾りのような場所（みっちりできる場所ならどこでもいい）を探し当てて、そこに落ち着く。ニホエヨが隙間にみっちりしたところで、小池はようやく話しかける。

「だから、もしまひるから二億円もらおうとしたら……旦那さんと子供かいたって事をどう考えたらいいのかな、って考えちゃって。いやだって、子供がいますとかいわれて、旦那とかに比べたら恋人なんてただの他人だぜ。口約束だぜ。まひるとは思いついて、たくさん作ったよ。でも子供ができた、とかに比べたら、恋人なんてさ」

「まひるさんの子供はどうしたの？」

「死んじゃったんだって。それで、旦那さんと離婚するんだって。でもまだ旦那さんいるし。世話してるし。まひるの。」

「それでも小池君、やっぱり二億円もらう権利がある気がする。え、だって、旦那さんは離婚しようとしてるんだから将来的に他人になるわけで、もちろん今旦那さんは二億円をもらう可能性はあるけど、五億の半分、正確に言えば二億五千万円でしょ？ 五千万円分、マケてあげてるんじゃない。旦那さんのぶん遠慮したんだなって思うよ多分世の中の人。絶対小池君、もらえるよ、二億」

「なんで付き合ったら、お金が半分もらえるとニホエヨは思っているんだろう。」

「小池君の発想は損してるよ。もっと貪欲に生きないと。それに、その二億円は自分の為に使うんじゃないよ。新しい恋人と、だから、私と新しい生活するためにつかうんだからいいじゃない」

「俺の五億円だけじゃだめなの？」

「ちがう。だめじゃない全然足りるむしろ余るしどうにかしてほしい使い道とか」

「じゃあなんで二億円」

「それは小池君が損してるからだよ。小池君は一時でもまひるさんの彼氏だったんだから、堂々貰えばいいんだよ。損をしてる人を私間近で見たくないんだけど」

「……いいよ。俺そんなお金いいよ。使いきれないし。ただでさえ五億円、どうしたらいいかわからないし。いいよお前に、俺の五億円あげるっていうか……一緒に使おう？ 五億円」

「やだ使いたくない」

「そうか。」

「使ったらなくなるようなもの使いたくない。つかったら私のせいでお金、消えちゃうじゃない」

「そりやお金なんだからそうなんじゃない」

「私絶対嫌なの。ここにあったものが私のせいで消えるのはダメなの。ごめんねわがままでこんなことじゃ小池君に嫌われちゃうね。」

「嫌わないよ、嫌わない。わかった二億円もらえるかどうか、まひるに話だけしにいっよ」  
ホワンワホワンホワンホワン、と小池は自分で口にしなげら、さっきまでのやりとりの事を思い浮かべていた。

新しい恋人は古い恋人から、半分弱の二億円を欲しがった。

なんとなく、それは女心みたいな感じもした。まひるは、今度振り込まれる五億円について何を考えているんだろう。

◆  
そのときまひるは何も考えずに、川の向こう側ばかりをみつめていた。川の向こう側の、ある一点を見つめていると、目の遠近感がおかしくなつて、次第に景色が変な風に見えるゾーンがある。まひるは夕暮れになり、本が読めなくなるくらい暗くなると、この目になる。ゾーンに目が入るころに、旦那が来るのも知つてる。旦那は前と同じような雰囲気、私を支える。

このゾーンになると、まひるはいよいよ混沌とする。記憶が消えたりする。

もともとまひるは、記憶と認識の統合がつかないことが多くあつた。

はつきりとそれが病院で障害だと認定されて以降、働きに出ることを控えていた。その診断がくだつたのは、五億円が全世界の人に振り込まれると伝えられた日の翌日の事だつた。まひるは多くの人と同じく、職を辞めた。

それでも毎日、働きに行つていた時間になると外出をした。そして知らない人の家に入り込んでリビングで裸になつたり絵を描いているような生活をしているうちに、自分の今の住所がよくわからなくなつた。パニックになり、たまたま目の前にいた親切な異様に背の低い人に相談した結果、同じ症状を持った人の共同生活場のような場所にとりあえず荷物を置くことを提案され、まひるはそこに住所を変えた。

◆  
そこは「誰でも、彼でも、そこに居てもいい家」という場所だつた。

◆  
もともとは、みなしごやお金がない人達が集まつて適当に住む家として機能していたのだが、五億円を貰えるという事になつて、そこにいる人達はどうしたらいいか、話し合つていた。

そもそも、お金がなさ過ぎて住む場所がなくなった人々がそこに集まっていたのだった。実にこの時、七〇人あまりが(この人数は上演規模に合わせる。この公演が行われるとしたら、座席数くらいと考えたい。この戯曲を読む人が、この公演は一度に見られる上限を先の数字の箇所当てはめる事。仮にここでは七〇名とする)同時に住み、息をしていたのだが、五億円振り込まれるなら、しかるべき場所に、しかるべき家賃払って一人一人が好きな所に住むという事ができるはずだ。

しかしここにいる七〇人はそうは考えなかった。なぜか七〇人はこの家に集まってきた。ただ、集まってきて、特に何もすることは無い。前と同じだ。五億円がもたらえるということが判明する前と、そのあとで、七〇人は——それぞれ葛藤やいろいろなあるだろうが——やはりこの場所に居て、ただいる。

まひるはその七一人目の住人として迎え入れられた。

家の中は、そんな七〇人ほどがうごめいていて、立錐の余地がなかった。

まひるはしかたなく、手荷物だけ置かせてもらう事にする。だがその家の「外部人」と呼ばれる不思議な立場の人——端的に言えばリーダーなのだ、その空間はリーダーをいえることが不自然なので、「外部にいる人」がリーダー的な仕事の代行をしている。外部人はこの中に住んだりなどはしていない——に、

「ここに荷物を置いたら、最後ですよ。もうあなたの荷物はあなたの物でもなくなりますよ」と深刻な顔をして言うので、その顔を見て思わずまひる笑ってしまった。

「私の荷物はもともと私の物じゃないと思うので大丈夫です。旦那と離縁を協議しているのですが、実際に物を買うのはいつも旦那で、名義も全部旦那で、私もし欲しいものがあったら、まず旦那に「欲しいもの買っていい券」を発行してもらう、という……ルール？遊びを？して、それで買いに行くんです。マシンが欲しかったら「マシン買っていい券」をもって買いに行く、とか、そんな感じで。でも、ほら私、職場以外の外出が幼少期のあれで、全然できなくて、スーパーとか物販売所みたいないけなくて、他人の家とかなら逆にスイスイ行けるんですけど他はもうパニックになっちゃうんであんまりいかないじゃないですか。だから、欲しいものがあるって、その欲しいものの券を旦那からもらったら、もうそれで物欲とか心が満足しちゃって、実際に物を買って、物を所有というか、持った事なんか、なかったんです」

「あ、でも服とかは？ 女性だし、服とかあるでしょう。いろいろ必要な持ち物。」

「それは、服とかってその辺に置いてありません？」

「え、ないですよ普通。え？」

「え？ ありませんか？ 私よく服は、家とか知らない人の家とかに置いてあるじゃないですか。そこにいつてそれを着て、今まで着てた汚れたものは……あんまりよくないけどその場で脱ぎ捨てて、捨てるんですよ。エコによくないとかは思うんですけど……。だから服を変えようと思ったら、知らない人の家とかに行つて、服を拾って、その場で着て、おし



まいですね」

「あー。なるほどねえ」

外部人はため息をつきながらまひるの話を聞く。

「服と言えば、シティーボーイズっていうコントやる人のコントで、服を恵まれない人に送るので、仕分けるっていうコントがあるんですけど、笑っちゃって。服を、送っていい服と送っちゃいけない服の二つに、ボランティアの男たちが……斉木しげるとかが……はは、仕分けるんですけど、笑っちゃうんですよ。なんか、ふざけちゃうんですよ。服で遊んで。それで、……斉木しげるがすごく怒られるっていう、ボランティアのまじめな女の人に。そういうコントで」

「ええ」

「私、そういう服を仕分ける男たちがいたら、いつまでも微笑んでいたいなって。で、そこで服着たいな。ボランティアで送られるはずの服だけど、仕分けられて、送る価値なし、みたいにならなければ……斉木しげるが恵まれない人に送る価値なしって仕分けた服を着て、今までの服はその場で脱ぎ捨てて。その服が汚れたりしたら、またその家に行って、斉木しげるが仕分けた服を着て、微笑んで、またどこかに行って汚れて、微笑んでいたい」

「ああ。まあ笑顔になれるのはいいですよね」

「ずっと笑顔で生活できれば、人生ってそれでいいのかっていう問題もありますよね」

「あー、まあそうですね。生存だけが目的ってわけでもないし、じゃあ精神的にねえ、充実してればそれでいいのかっていう、そうですね。それは確かに」

「はい」

「そうですね」

「あ……あの、はい。あの、荷物わたし、あ、椅子……」

「椅子？」

「そういうとまひるは、「誰でも、彼でも、そこに居てもいい家」の居間の中にあつた椅子を指さす。

「家にある椅子があるんですけど確か、椅子がうちに部屋にポツンであって、あるんですけど、あの、あの椅子、違うんですけどもここに持ってきたって事で、ここにある椅子、私の物って事にしていいですか？」

「あれはこの椅子ですね」

「でもうちにも椅子、あるんですよ。形全然違いますけど」

「ええ」

「椅子って……座りたい時ってあるじゃないですか。足が疲れた時とか……。家に椅子、あるんで。あつたんで。だからあの、ここに私が椅子を持ってきたって事にして、仮に、この椅子、私の椅子って事にしてもらって、こちらに置かせてもらってもいいですか？」

「……あー、ちょっと待ってください。ちょっと……すいません、ちょっと、あの、なんていうんでしょう。今あなたが何言ってるのか全然わからなかったですマジで。……僕ね。ち

よっと、あの、目が悪いもので、左目ももうちょっとほとんどわかんない状態なんですよ」  
そういうと、外部人はノートを取り出す。

「ちよっと、今しゃべってもらった事、分からなくて、僕理系でして、図にしないとわかんないんですけど、僕わかんない事があるとずっと、図にして書いて理解してきました。でも先天的な目の病気がしくて、目がどんどん見えなくなってくるから、いままで図にしているんなことを分かってきたんですけど、僕、将来的に目が完全に見えなくなったとき、分からないことが出てきたら、どうしたらいいのかなって思いながら……ちよっと、図にして考えさせてください」

外部人はB5のノートを広げ、中心に「まひるさん」と書いた。

〔「天」の部分に、ノートの画像が生中継で照射され、観客と閲覧できる。この劇中、外部人はこれ以降、特に指定がなくてもノートに様々な言葉を書き込んでいく。それはセリフの一部かもしれないし、稽古の過程で出てきたワードなどを照射するといいい〕

《まひるさん》↓《持ち物》↓《ここにおきたい》

そう書き、もう一度外部の人はまひるを見る。

まひるは——（この辺りは衣装担当者の意見が優先されている。「知らない人の家で手に入る衣服」というものが表現されていれば何を着ていても問題ない）——というような服を着ていた。

外部人は、その衣服の色彩を感じ取れないほど視力は後退していた。だから、ふいに、外部人の手がまひるの服に触れる。それは、まひるの体にも触れていることにもなる。

まひるは、別に外部人がいやらしい意味で触ったわけじゃないんだろうなとは思いつつ、特に何も思わなかった。

外部人はまひるに触った後、ゆるゆると、まひるが先ほど指摘した椅子の所に移動すると、その椅子に触る。触ったのち、ノートに書き込む。

《まひるさん》↓《持ち物は特にない》↓《まひるさんの椅子はまひるさんの家にある》↓

《ここにある椅子はこの家のものだが、だれのものかわからない》

「あ、そうですね。そうそう、そうです」

まひるは外部人が私の考え方をゆっくり分かっていく感じがちよっとうれしく、楽しかった。

《まひるさんの椅子とこの家の椅子は違うものだが、用途は同じものだ》↓《まひるさんの椅子は、ここではない所にある》↓《だからとりあえず、いまここにある椅子は、まひるさんのものにしていい、のだろうか？》

と「のだろうか」の言葉を書き加えて、外部人は動きが止まった。考えている。目を閉じる。目を閉じなくても、外部人の視力は弱っているため大して変わらないが、集中して物を考える時外部人はそうしている。まひるは、目をとじている外部人を見ている。

「《ものにしていい》というより、あの椅子を、私の物だ、って《思っいい》ですかかっていう、そういう感じですかね」

「ああー」

「だめですか。思っちゃ」

「いいと思います」

「やった。じゃあお願いします」

不思議な事に、これ以降もこれ以前も、まひるの椅子にはまひる以外誰も触らなかったし、座らなかった。触ったのは外部人がノートに書く前の、一回だった。イスは、この家に住人が住み着く前からあったかもしれない。でも、まひる以外の人が座った形跡がない。

◆ まひるが、外にその椅子を持ち出して読書する生活が一〇日続いている。

◆ 記憶はとびとびだ。まひるはそれが分かっている。

一日は二四時間あるし、人は過去には遡れない。それは私たちの居る世界と同様で、この世界の人々も時間に逆行することだけは絶対にできない。

しかし、時間がとびとびになることはよくある。それは短縮されたわけでも間引かれたわけでもなく、記憶がとびとびになってるからだ。そうとしか考えられない。まひるは、自分で自分が少しおかしいという自覚を思っていた。ただ、他の人と同じ程度くらいのおかしさだろうとは思っていて、欠点の一つだと思ってもいる。記憶がとびとびになるのが私の欠点であり、欠点という傷口から切なくこぼれ出た個性だ、とも。

だから、理解の難しい本にはノートを取る。読書しても途中で記憶がとびとびになるからだ。わからなくなったら、その都度、感じた事をノートに書く。読書していた時の記憶を後で追体験したい場合、そのノートを読むことで記憶の穴を補完している。

自分の記憶と認識の折り合いをつけ、何が現実起きていて、何が自分に起きた出来事なのか、毎日検証しているようだと思った。とびとびになる記憶を、断片的なノートを頼りに、あの時私は何をしていたのか、何を思っていたのか。昨日私は何をしていたのか。今

日、私は何をしていたのか。まひるは読書し、川を見ながら思い出そうとしている。だが、そのこと自体もまた、今こんなに強く思っているのに、どうせ忘れる。絶対に忘れる。私が私の姿をして、読書をし、何か思っている現在を、未来の私は絶対に忘れる。書かなきゃ、とまひるは思う。外部人もノートを取っていた。外部人は未来、ノートを取る事が出来なくなつて、複雑な事を考える事が出来なくなる。でも、と思つた。視力を失つた人でもできるノートに変わる思考法や記録の残し方はあるんじゃないだろうか。外部人は、ノートを取る前に、私に触り、椅子に触つた。なにか触る事で、いい触り方や、工夫した触り方をする事で、ノートを取つたり、ノートを読んだり、ノートに書いてあることを音読して再現することはできるんじゃないか。

(同じころ、天に照射されたノートに、文字や図で、まさに外部人は同じような【視覚に頼らないメモ取り方法】を思いつきつつあった。ノートには《目に頼らない記憶の遡り方法》《目に頼らない思考の補助》《もう僕はだれにも頼らない》《目で物を考えなくてもいい世界に僕は人よりも早く突入し、先に覇権を握る事が出来る》《星に視力がない以上この星で生まれた息子として、星の正当後継者は僕だ》などの文字が躍っている)

まひるは、かろうじて、はつきりとした記憶がある昔の住所のこの場所にやってきては海のような川を見ている。川を見ながら、こんな風に本を読む生活が、一〇日だ。ずっと続いている。途切れながら、ずっとずっとずっと。

◆  
スイッチみたいに、まひるは夜、暗くなるとストンと寝てしまう。  
五億円が振り込まれる日々が近くなつて、このテラスに外出するようになって、やつぱり暗くなると寝てしまうのだった。それは、冷静に考えれば、五億円が振り込まれることが明らかになる前から、ずっとずっとやってきた事と変わらないはずだ。

◆  
ツルハシは夕暮れになるとまひるの場所にやってきて、日が暮れて、周囲が真っ暗になるまで付き添い、そしてまひるが眠たくなるころ、体を支え、まひるが荷物を置いて世話になっている「誰でも、彼でも、そこに居てもいい家」にまひるを運びに行く。今日もそのために来た。

ツルハシの生活もまた破たんしていた。  
五億円が振り込まれるという事になってから、ツルハシの会社が立ち行かなくなった。ツルハシは部長クラスの管理職であり、部下が一五人いる。だが部下は全員ツルハシを「人の

話を聞かない、自分が正しいと思ひ込んでいて怖い人」と思っており大変腹を立てていた。実際ツルハシは一五人の部下の直談判をうけ、自分の性格を修正するように求められた。自分には自覚が全くなかったので、ツルハシは心の底から驚いていた。しかし一五人の部下は「まず認めてください。ツルハシさんは独善的で、他人の意見を聞かず、自分が正しいと思っている事しか耳を貸しません。ツルハシさんには感情がないです。心がないです。まずその事を自覚してください」と迫る。

小さな会議室だった。

トイレにも行かせてもらえず、ツルハシは七時間部下の訴えを受けた。部下は一五人いたので、一五人はローテーションを組んでちゃんと休憩しつつツルハシに話しかけていたが、ツルハシには休む時間が与えられない。それを不公平だとツルハシは言ったが、「またあなたは自分の事が正しいと思つて、自分が被害者だとすら思っている。罰として休憩時間はゼロです。そこに片足で立つててください」と怒られてしまった。

それ以来、ツルハシは反省し、自分自身を「独善的な、人の言う事を聴かない感情のない人間」だと思つようになっている。だから、気を付けて接しないとイケない。だが、具体的にどうしたらいいかわからない。

五億円が全世界の人々に振り込まれるという事になったのは、そんなさなかだった。そして、部下の大半が振り込まれたら退職すると言ひ出した。

ツルハシは、退職はおかしいと思つた。

会社は、たしかに給与目的で働いているけれど、それだけじゃないだろう。もつと前向きな気持ちもあるはずだ、と、信じていた。会社つとめた事で自分はまひると結婚する自信もついたし、今離婚について協議しているのも、会社で自分が仕事を上手くいかないのが原因だと思ふ。自分が独善的で、他人の意見を聴かないから、こうなるのだ。

まず会社の部下たちを「同志」と呼ぶことから初めてみたらどうか、と提案した。五億円を振り込まれてしまうなら、給与を中心とした人間関係ではなく、志を中心とした人間関係になれば、今まで通り仕事ができるのではないか。

ツルハシが皆を「同志」と呼び始めてから数日。一五人いた部下はほとんどが辞めて、今や三人になつてしまつた。

その残つた三人と言うのも、「犬」、「マメ」、「モチ」という、もともと人間ではなく、退社の意思を示すことができないメンツだったので、今ツルハシには部下が実質ゼロ人だ。もともと部下たちの不満として「犬はまだ生き物だからわかるけど、マメとかモチとか、無機物を部下としてカウントするのは本当に間違つている」というのもあつた。だが、ツルハシとしては犬も豆もモチも大切な部下として、助けられたり、不審な人物に吠え掛かつてもらつて防犯になつているとも思つて仲間として信頼している。

だが、こうして残つた三つメンツとデスクを並べても、彼らは何の仕事もできなかった。無能を信頼していたのか、とツルハシは感じざるを得なかつた。

ツルハシは本当に苦しいと思った。五億円を貰える世界は、生きているだけで五億円を取られていた世界と同じくらい、辛いのではないか。

◆ 「五億円は、動物には振り込まれません」

と、アナウンスがあつたのは、全世界の人々に五億円が振り込まれることが決定した翌日だった。どうやら口座を作る際、ペットに口座を作ろうとした人が続出したため、神は慌てて全世界の人々の心に直接訴えかけてきたのだ。

『犬に仏性はない』という事が、証明されてしまった気がするよ」と、ツルハシの幼馴染で、小さな村住職をしている男が苦笑いでツルハシに語った。

そのころツルハシは離婚協議に入っていた。五億円が振り込まれることが確定してから一週間たった日だった。妻のまひるが家出し、よくわからない家に共同生活を始めてしまつて以降、ツルハシは着ている服を着替える、という事に神経が回らなくなり、この日からツルハシはずっと同じ服を着ている。幼馴染の僧侶はツルハシの服を見て「お前相変わらずだなあ」と微笑み、肩をポンと叩く。

住職という仕事も大変らしい。神が五億円振り込むということに、仏教界でも議論が相次ぎ、仏の道にいる人間が五億円を貰ってもいいのかどうか多くの人が悩んでいた。新宿のロフトプラスワンというイベント会場では【お坊さんだけど五億円もらってOK？ もらう派・もらわない派。二手に分かれて激論ブツダークナイト】というイベントが催されるくらい、迷える僧たちが自分の考えをぶつけあっていた。

ツルハシは、自分の子供が死んだとき神と仏を呪ってしまった手前、僧侶になった幼馴染とはその時まで疎遠になってしまっていた。だが、まさか五億円もらう世界になったのをきっかけに、こうして話ができるなんて思わなかった。

「僕は五億円をもらうことにしたよ」

幼馴染は、五億円を貰う事にするという。

「その五億円で、人々を幸せにしたいんだ」

その五億円で、人々を幸せにしたいと言う。

「ただ、どうすれば幸せになれるか、わからないんだ」

ただ、どうすれば幸せになれるか、分からないという。

幼馴染はお坊さんをやめて、五億円が振り込まれる日まで髪を伸ばして、ロン毛にしてみると言った。まずはそれからだ、と。

◆ 小池は都内に住んでいる。まひるが住んでいる場所からは直線距離で四〇キロほど離れ

ている。だから、まひるに会いに行く時には車を使っていた。車は借金して購入した。自分の家賃とほぼ同等の駐車場代を払いながら、働いていないので毎日借金をしながら暮らしている。

借金をするとき、担保や保証人といった手続きがなるべく少ない金融業者にしていた。小池には「お金を借りる」ということがよくわかっていなかった。返す。必ず返す。それは分かるんだが、じゃあなぜ貸してくれるのか。利子がついて儲かるからか。

でも小池は最初に受付の人に「俺は利子を返せるような人間じゃないんですよ」と何度も説明していたし、伝えたはずなのだが、コミュニケーションがうまくいっていないのか、恫喝に近い言われ方で利子を含めた額のお金を返すように言われるようになり、この間は寝ているところをガムテープで縛られた挙句、家中のものをタンを吐かれたこともあった。小池はぐるぐる巻きにされながら、タンを吐く恫喝する人に対して「そうか、ここで暴れて家の物を壊したらますます修理費でお金がかかるから俺はお金を返せなくなる。だからこの人は、タンを吐くことによって、物の価値を減らさないまま俺を脅して、嫌な気持ちにさせてお金を返そうという気を起こさせているのか」と、そのやり方にすごく感心していた。

その後、五億円が振り込まれることになって、借金問題は解決した。小池には二千万の借金があったが、五億円を貰えるのだから差し引き四億八千万円の黒字である。

中には「そんなの怪しいしおかしいから今のうちに真面目に働いた方がいい」と言う見ず知らずの人がいたが、小池はお金は借りるより貰う方がいいと思って、素直に口座を作りに行った。後で聞いたら「真面目に働いた方がいい」と助言した人も、いつの間にか口座づくりを完成させていたという。

まだ、お金は手に入っていない。

手に入ったら、どんなことに使うだろうか。とりあえず車の維持費と駐車場代。家賃。あとは、旅費とガソリン代にしようと思っていたが、五億円を貰える日が近づくにつれ、ガソリンスタンドが次々に閉店していく。理由はよくわからないが、誰かがガソリンを買い占めているらしい。なんでそんなことをするのかよくわからない。おかげで、小池は車から次第に乗らなくなった。

だから小池は歩いた。

車なら国道を使うが、徒歩の場合は川沿いの道を歩く。都内からこの街まで、川が流れている。川の流れをさかのぼるようにして、まひるのいる場所まで歩いた。

さつきまで、歩いてここまで来たんだよ、と小池は思った。

五億円もらえる世界になって、俺は歩くようになったんだよ、と。

車に乗れなくなったのはすごく残念だし悲しいけど、俺はこれから歩くことにするよー、みたいなことを話そうと思っていたのに、事前に準備した言葉はいつも言えないで、そのままになる。



眠るまひるを、旦那のツルハシが支える。小池も支えようとしたが、でも小池は単なる恋人だから、支えない方がいいんだろうなと思って、何もしなかった。

ツルハシが体を器用に動かして、まひるを背負う。

「あ、どこか行きますか」

「まひるが今、世話になってる家にまひるを届けようと、俺はまあ、今してるんだが」

「そうなんですかね」

「こんな夜まで小池さん……小池くん、あれだよ、明日は……もう数時間後か、五億円振り込まれる日なのに。」

「それなんですけど、あの、まひるも五億円もらうって言うてました？」

「うん。」

「あー……。」

「どうかしたの」

「いや、あの言いにくい事をちょっとまひるに言おうかなって思って」

「そうか。別に言わない方がいいよ、そういうのは」

と言いながら、二人はそのまま、どこにも行かない。お互いに何か去りがたい感じになっている。

「ツルハシさんも五億円もらうんですよね」

「あー、なんかね」

「もらわないんですか」

「口座、あるでしょ。口座。……俺、作らなかった」

「えー……えー……！ あ、作らない人なんているんですね」

「うん、なんか」

『働かざる者、食うべからず派』なんですか」

「違う違うそんな立派じゃないよ。なんか、口座つくるのが面倒でさあ」

「わかります。俺も新しい恋人に作ってもらいましたもん」

「ね。なんかさあ、みんなが五億円もらうって話しててさあ……同志たちが、お金がもらえるからって本当に会社辞めて……なんだらうね。俺は歯向かいたかったのかなあ」

「何にですか」

「五億円もらったら、五億円のこと考えなきゃいけないじゃない。使い道とかさいろいろ。

俺はそれよりも、仕事したかったからさあ。今、一番したい仕事あってさ……あのさ、動画の生配信とかあるじゃない。あれ簡単にできるようになったじゃん。スマホかパソコンがあれば。あれを利用して、もつと何かこう……できないかなあってなんかね。商品のPRだけじゃなくてさあ、ラーメンおいしいよ、おすすめだよみたいな動画ばかり再生回数多くて……そういうんじゃないじゃんきつと、生配信が一人一人できるって。商品買ってくださいみたいな企画以外の事がもつと」



「ああいいじゃないですか」

「でも五億円振り込まれちゃうからさあ……。いままでの企画書が全然。もうさ。そもそもお金増やしたい……違うな、少なくとも、損しない前提が企画じゃない、仕事って。」

「俺はバイトしかしてないからわかんないですけど。」

「モグモグ」

「あー、ええとね、仕事って、二番目に大事な事は損をしない事だから」

「一番はなんですか」

「仕事しない事」

「あー」

「モグモグ」

「ん？」

「でも俺はさ、まひると結婚したから、子供も生まれたから、仕事しないとイケなかったから。損しちゃいけない、しかも皆が、というようなこと考えてたらさ……五億円が振り込まれるようになったからさ」

「モグモグ」

「あの、さっきからモグラが……」（実はモグラが出現している）

「でも、それ、未来だろうって。今すぐ振り込まれるんだったらまだよかった。なまじ時間あったでしょ。お金を振り込む準備する時間だから仕方ないけど、……未来にお金がある、みたいな状態が、しばらくあって、俺はだめだったな。俺はだめだった。耐えられなかった。こわれちゃったよ。五億円が、未来にあって、皆何もしなくても五億円儲かって。」

「モグモグ」

「おいモグラ黙ってろ」

「未来に五億円ある世界なんて、数か月前は想像もしていなかった。俺たちは、ローンとか、日本の国債とか、未来というのはいっだって借金とか、何かをむしり取られるような、地獄が前提で生きてきたんだよ。俺、腰が抜けてしまったんだよ。なんか。未来が地獄だから、地獄に負けない様に、頑張って、這ってさ、なにくそって、生きて行けたのに。もうね、何をもがいても、全員が五億円もらえるんだよ。逆に、何をしたらって、もがいたって、損することできない。たった数日くらいで五億円分を損することって、なんだろうな。俺たち程度の能力だと、誰かを殺すか死ぬくらいしかできないじゃないか」

「モグモグ」

小池の足元にいたモグラが、小池の足元を引っ張り、手招いている。

小池は、一応恋人の旦那の真剣な話を中断しては悪いと思っただけで必死に耐えていたが、モグラはさっきからのすごく楽しそうな雰囲気を出しているし、口笛も吹いているし、手にはなんだか振ったらしい面白い感じになりそうな棒も持っていて、とにかくいろいろくすぐる感じなのだ。

小池は耐えた。小池は旦那のツルハシのつまらなさそうな話を聞くのも面倒だったし、モ

グラの楽しい感じの誘惑を断ち切るのもつらかった。でもここで堪えないと、まひるから二億円はもらえないかもしれない。もらえないのはまあいい。問題なのは、自分がまひるの五億円のうち二億円を欲しいという気持ちを、伝えきれないまま別れたら、新しい恋人のニホエヨに申し訳ないなという事だ。



でも、だめだった。

モグラは手にしていた棒を口につけると、楽しそうな音を棒から出した。棒は笛だったのだ。楽しい感じの音楽が流れると、もう小池の注意はそっちへ行ってしまった。

小池はモグラに勧められるがまま、そのまま足元の穴に潜っていき、モグラに案内されると、そこはもう、モグラの世界だった。小池はモグラの世界にきてしまった。(モグラの穴から何か風景が照射されていて、奥の海に見える川が見え方が異なっている)

「おいモグラ、ここはどこだ」

「へい、ここはモグラの世界。モグラランドだよ」

「ははあ。あの中央のお城はなんだ」

「シンデレラ城だよ」

「へえ」

「シンデレラ城の中のお昼ご飯はうなぎだよ」

「モグラのくせにうなぎなんか食べるのか、こいつ」

モグラはずっとにやにや笑って楽しそうにしている。小池も、楽しい空気は分かるのだが、そしていつもの小池なら何もかも忘れて、楽しい感じになっているはずなのだが、まひるの事や五億円の事が気になってしかたなくて、今一つ楽しめてない。

それでも、モグラランドにきてしまったのは、小池がもともと軽薄でばかな所があり、それが自分の個性だし、運命だと思っているところがあるからで、現に小池はモグラに言われるがままにモグラの格好を少しづつ、茶色いタイツを履いたり、手と鼻をドリルにしたりしているのだった。

「おいモグラ。モグラランドになんで俺を連れてきた」

「君がモグラの世界に行きたがってたからだよ」

「なんだと。たしかに俺はもう鼻も手もドリルにしまったしな。ちょっとノリノリだったのは否めない」

「だろ？ でもお前が死んでも人間の世界は生き続ける。これは科学的に証明されている」

「モグラのくせに科学とはなまいきなやつらだ」

「そもそも、小池が死んだら、お前だけの死じゃなくて、例えばお前、セックスの時精液を出すだろ？ 精液一グラムに大体、五億匹くらいいるんだぞ。それらが小池一人の死によつて、全員死ぬことになる。お前からは死の匂いがした。クレヨンを食べたらしいじゃないか。

おまえそれは、死にたがってたからじゃないか？ 凶星だろう。クレヨン食べ自殺を考えていたんだろう。モグラの直感によく当たるんだ。だったらそれよりも、夢の国・モグラランドに招待して、面白おかしい生活を一生し続ければいいさ」

モグラが精子の話をして「五億」のくんだりで、「あ、精子一発で五億なんだ」と小池は思った。

そしてその五億匹の死の責任をどう取ったらいいか、とも思った。五億匹もいたら、五億円の謝罪金を払っても、一匹当たり一円になってしまふ。一円を添えた謝罪って、なんなんだろう。一円に、申し訳ないっていう気持ちでプラスすれば、精子たち五億匹の死に対して、なんかちゃんとやったという感じになるのだろうか。

ホワンホワンホワン、と小池はまた口にして、思い出の中のニホエヨを呼び出す。ニホエヨとセックスした時、あの時、俺は五億匹殺していたんだなと思った。

かつてニホエヨは「子供が欲しいと思っている」とは言っていた。今もニホエヨは小池に向かつて言う。

「今すぐじゃない。子どもが欲しいのは。でも、もう少ししたら五億円がもらえるし、私の五億円と、あなたの五億円と、まひるさんからもらう二億円の、一億円あれば、どんな馬鹿でもちゃんと子供育てられると思う。だからね、私たちが馬鹿だったんなら、馬鹿じゃない人を三億円で雇って、お父さんにお母さんなってもらえばいいって。三億あれば、お父さんやお母さんをやってもいいという人が、この世界のどこかにいるかもしれない。」

「僕たちはどうするのさ。雇ったら」

「それを、見てましようよ。で、余った二億円をさ……使わないままにしてさ。安心しましよう。二億円あるんだなって。うちには二億円ある。こんな安心することある？ もう何も不安な事ないよ。働かなくてもいいし、プライドなんてないアピールもしなくて済む。それたら、小池君はもうすこし、私に優しくできる気がする」

◆  
気が付くと小池は穴に半分埋まっている状態で発見された。

小池は、出る穴を間違えたと思った。そこには誰もいなかった。この穴は、川のこちらがわではなく、あちら側だ。

あちら側の世界。つまりここは、私たちのいる世界なのだが、生きている者はほとんどいない。

ご存知の通り、結構な数の人が死んでしまったのだ。

あちら側の世界で五億円を全世界の人全員に振り込むことができるのも、私たちが死んでしまつて、私たちが所有していたはずの富を、今のところ生きている彼らに再分配するからである。

私たちの世界でも、死んでしまつてお金を使う事はできない。普通であれば親族にお金は分配され、いくばくかのお金は国庫に入るが、やはりご存じの通り私たちの国はとっくにな

くなってしまう。モチ、マメ、犬などが、この国由来の物としてその辺に転がっているが、モチやマメなどが国を代表した活動などできるわけもなく、そもそももう、国土もない。小池が今埋まっている「穴」というのも、概念的な穴みたいなものであり、正確に言えばここも、川だ。土地ではない。水が流れている。形を持たない。ぐにやぐにやだ。裏ごしされた芋が流体のようにうごめいているだけだ。私たちが知っている通り、ここには国家も、人も、概念もない。今、流れつかれて犬が死んだ。モチとマメは何かの流れのなかにいるが、しだいにマメは流れの底に沈んでいった。

◆

「子供ほしいんだ、小池君」

「(ええ)」

川の向こう側からまひるの音がする。小池は、生きている感じを出さないまま、念じる事で返事とする。

「なんか、そんな話してたじゃん。さっき」

「(ああ……)」

「私、いいよ。お母さん、やるよ。別に三億円もいらぬ。だって、五億振り込まれるから」

「(その話なんだけどさ。一億円……なんとか俺がもう事はできないかな)」

「私子ども育てるの、得意な気がする。本の読み聞かせとか、きっと好きだし。……今読める本ね、不破哲三のね、『資本論全三巻を読む』っていう本。本当はね、普通にマルクスの資本論、読んでみようかなって思ったんだけど、あのね、序文？ ていうの？ 序文多すぎて、子供たぶん、飽きちゃうとおもうから。あと岩波文庫ってなんか文字小さい」

「(そうかー)」

「いいよ。旦那とも相談するよ。大丈夫。私たちには五億円ある。大丈夫。今度こそ大丈夫。きつときつと。だって五億円あるんだもん、今度こそ、私たちは、幸せになれる。なれるっつ。」

◆

ツルハシは、寝言のようなまひるの言葉を背中で聞いている。夢の中で、まひるは恋人と会っているようだ。その寝言の中で、恋人は、別の恋人と子供を作るらしいが、彼らがろくでもないで育てられないらしく、まひるに母親をやってくれるよう頼んでいるらしい。そして、どうやらツルハシは父親を担当するようだ。

「へえ……」

ツルハシはテーブルの上の芋に視線をやる。

「小池君あのさ」

小池がここにいないのは知っている。いつの間にかいなくなっていたが、まひるの夢の中にはいるんだろう。だからまひるに声をかけている。

「小池君さ」

「……はい」

夢うつつのまひる。まひるは寝ぼけて、小池君になり切って返事する。

「芋……あの生の」

「はい」

「あれ、俺、いいや」

「あ、……そうですか。でも電子レンジで簡単にふかす方法もあるんですよ。あんまりおいしくない気がしますけど」

「あ、そうなの」

まひるは、小池の口調で言葉を返す。小池を再現するため、概念としては寝たまま、肉体としては覚醒して、小池のフリをして立ち振る舞っている。

「そうなんですよ。電子レンジ用の容器に、ちよつと水をいれてそれで」

「あ、おれ電子レンジ用の容器使うって時点でもう駄目だわ」

「ああー」

「それ専用の容器が必要な家電って、家電として失格な気がするんだ」

「ああー」

ツルハシは小池のまねをしながら眠るまひるを落ち着かせ、椅子に座らせる。

一方まひる自身も今、小池として話しているのかまひる自身として話しているのか、あるいはまひるの夢の世界の地の文を読むナレーションとして話しているのか、曖昧な心地をしていた。

ツルハシは、もう相手は誰でもいいと思いつつ話しかける。

「……仕事する人間も同じだよ。それ専用、みたいな作業ばかりを要求するようなプロジェクトを企画立案する時点で、それどころか予算と人材潤沢に使う気だよっていう……いやもう、五億円振り込まれるからもうねこの嘆きもね。全部消えちゃうんだよね。悩んでいた事とか……ね。別にね」

「そうですね」

「なんで新しい恋人作った？」

「はい」

「まひるがいるでしょ」

「そうなんすよね。いるんだけどね」

「まひるじゃだめなの」

「……わかんない」

「ああ……。じゃあさ。じゃあさ。俺がもしさ、まひるから、小池の事を殴って言われたとしたらよ」

「はい」

「殴っていいのかな」

「それはちょっとダメですよー。暴力は。なんで殴るんですか。殴る事で解決になるんですか」

「だろ？（何が「だろ」なのかはわからない） だよなあ……」

「はい……」

「五億円振り込まれることとき、新しい恋人の事とかさ、君の生き方はさ。全然関係ないんだなあ」

「あー」

「……殴っていいかな。いいだろ。まひるもさ。普通に恋人作ってさ。たぶん、俺はいつでも殴っていいんだろなって思いながら毎日暮らしてた。もう恋人がいる事、隠すことも諦めてたよな。まひるに恋人がいること。離婚協議中だから、別に恋人作ってもいいとは思ってたけど、でも、俺が働いている時にデートするのは、ちよつと考えてほしかったな。生活するためにさ。安心するためにさ。安心してほしいからまひるに、俺は働いてたわけで。その間に君は……君らは……袋田の滝とか行くわけだろ。それ、俺といたところだよなあ。蕎麦の美味しい所だったよなあ、そこ。ソバガキ食ったのかあ……俺は働いてるのにさあ……でもなあ、もう五億円が振り込まれるんだから……。そうだよなあ。俺が働く意味、全くないよなあ。……俺は、どうしたらよかったのか。どうすればいいのか。どうしていいかげいのか。」

ツルハシはなんとなくまひるの手を握る。

遠くの、海のように見える川の向こうで、また何か光る。爆発らしい。向こう側で、つまりこちら側の、私たちの世界で、また人が死ぬ。私たちの世界の人が持っていた財産は手放される。向こう側の世界、つまりまひるたちの世界に財産は吸い込まれる。

◆ 「神は自分の体を金に変えるか、水に変えるか、お悩みになっている。いずれにせよ五億円と言う大きなお金が動くので、神も慎重になられている。神の体が一度物質になると、もう二度と元の精神的な概念で戻れないので、どっちにしようか慎重に見極めなさっているのだ。神は自分の体を呈して、五億円の金額の振り込みの根拠・担保になろうとしておられる。振込金額に信用を与えるため、神は「神が姿を変えた金」か、「神が姿を変えた水」のどちらかになります。あなた方は具体的な形を伴った人間なので、概念を物質にする必要があるのです。そうすれば、人々が「水」か「金」を信用する限り、振り込まれた富の信用は落ちない。そして神は、自分の体を物質にしたら、その姿を見られない様、地下数千メートルに

自分の体をお隠れなさろうと決意なされている。もうお姿をさらすことはない。神が地下にお隠れなさる際には神自らの体との交換を保証する誓紙を発行することを約束なされるだろう。水か金か、まだわからないが、その誓紙が神の水か金の代わりとして、神と私たちの契約として——『私たちはいつでも、その紙をもっていれば、神の体を物質化した金か水と交換できます』——ということとなるだろう。明日、口座残高を確認していただきたい。預金通帳に記された数字分、あなた方は神のかつて体だった、金か水と交換できます。もう二度とそれに眼に触れることはできませんし、触れることも感じることもできないでしょうが、あなた方は神の体を物質化したものを、所有することを、許されました。それらはかつて別世界の人々が蓄え、そしてその死によって解放された富です。どうぞ、五億円です。受け取ってください」



五億円が振り込まれた。

全世界に、専用口座を持つすべての人に平等に、同時に振り込まれた。

まひるは、振り込まれる瞬間を見たいなと思っていたが、夜中だったから眠ってしまったため、記憶が途切れている。

目が覚めると、ほほに少し痛みがあった。痛みの部分にふれると、腫れていて、やや暖かい。

まひるはそこに手をやりつづける。しばらく、間。



天を見ると、さまざまな文字が浮かんでは消えている。まひるは自分の目を触れる。自分の目を疑っている。周囲が、あまり見えなくなってきたらしい。外部人と同じ症状なのか。

ふらふらと、椅子から立ち上がる。頼りなく歩いている。一度椅子から立ち上がると、さつきまで座っていた椅子に戻るのは困難だ。

何者かが、よろけたまひるを支える。

それがツルハシなのか、小池なのかわからない。

川の向こう側の奥で、瞬きがある。

星は、遠くの星が瞬くのは、地球に空気があるからで、星のまたたきは空気のゆがみによって引き起こされる。

遠くの、あちら側、つまり私たちの世界で起きている無数の死、それは、瞬きと言う形でこちらに伝わって、富をもたらしている。私たちの空気が震えるたび、富は今もこうして、あちら側に一方的に届いていき続けるのだ。

作 山本健介

演劇計画□戯曲創作「SF—到来しない未来」（主催：京都芸術センター）

委嘱戯曲 第一稿（2017.11.01）



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示・継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。

本稿の上演・二次創作・改変・再配布について、許諾申請等は必要ありませんが、事業と戯曲創作の参考のため、京都芸術センター（e-mail: info@kac.or.jp）までご連絡し一報いただければ幸いです。

※なお、H30年に発表予定の決定稿については、著作者に断りのない使用・改変・再配布を禁ずるかたちでの発表を予定しています。